その一　関係者の思い出

（一）女専・高校関係者

初めて訪れた日

平田　富美江

昭和二十五年の夏、私は国鉄可部線に生まれて始めて乗車した。竹藪と田園の中をゆっくり走る汽車の中から、日頃見慣れない外の景色に見とれていた。しばらくして古市橋駅に着いた。

その数日前のことである。藤本悦子さんという友人から、「今私は武田学園に勤めさせていただいている。貴女をこの武田学園の家庭科の教師に推薦したいと思うのだが、どうか」という声がかかった。私は実に驚いた。というのは、当時の一般女性の進む道、すなわち学業を終えたら家庭にいて家事見習い、お稽古ごと等にいそしみ、やがて訪れる結婚に備えるといったことを考えていたからである。

責任重大な教師としての不安、そしてそれは未知の世界への冒険のようにも感じられた。私は不安のまま、ちょうど夏休みで帰省中の兄に、早速このことについて相談をした。兄は〝これからの女性は従来と異なり、自己の持つ能力を社会において発揮させ、社会に貢献する時代だ。家庭の中に埋もれていては進歩がない。大いに社

会に出て勉強するように〃と勧めるとともに励ましてくれた。私はいろいろと考えた末、学校を訪問することにした。

広島県可部女子専門学校は、古市橋駅より川添いに五分位歩いたところにあり、コの字型の校舎で、戦時中は麻糸工場の寮だったと聞いたが、戦後まもない風水害で外壁はところどころ崩れ落ち、荒壁はさることながら中の竹まで姿を現わしているところがあった。

来訪を告げると、自分とはあまり年齢の差を感じさせない立派な体格の生徒が廊下に正座し、礼儀正しく応待してくれた。その姿が廊下に鏡のように写るほど校舎全般に亘って掃除の徹底がはかられ、整理整頓がなされて、外見からは想像もつかない雰囲気であった。

校長先生は校舎の一室で永い闘病生活を続けられ、ギブスの上に臥しておられた。学校経営はもちろんのこと、教育全般に亘って深い情熱をかたむけておられるそのお姿に心を惹かれた私は、まもなく校長先生のご指導を仰ぐことになるのである。まことに荒削りのまま大人になった私であったので、校長先生にはいろいろとご迷惑をおかけしたが、先生はその至らぬ私に対し、微に入り細にわたってご指導くださり、わが娘に接するように心から育んでくださった。校長先生の指導のもとに、おかげで他の職員の皆さんと勉強をすることができたのである。

当時の校長先生は、教員室のギブスベッドに仰臥のまま教育経営にあたられていた。毎日の職員朝会には、私ども数名の職員と朝の挨拶を交わされ、一日の計画の指示、一日の出発にあたっての心構え等、いろいろとご教示をいただいて、私どもはそれぞれ張り切って教室に向うのである。週一回の職員会議はもちろん、毎日の終礼の反省にもきめ細かくご指導を仰いでいた。そして教育方針である〃最短期間に、最少の学資で、最大の学習効果を挙げ、実力を体得し、社会に貢献できる人材の育成に〃をモットーに、全職員が一丸となって全力投球をした。父兄もまた実によく協力してくださった。その一例をあげてみたい。

本校では毎年秋になると、日ごろの学習内容を父兄に見ていただくために、父兄会と併せて作品展示会を催していた。また、創設まもない学校を知ってもらうために一般の方々にも公開したが、作品展示を見学されたご父兄より、〃学校内容をより広く皆さんに認識してもらうために、身近かな在校生の母校である中学校において移動展示会を催したらいかがか〃と提案があった。私ども職員は、本校のＰＲのために役立たせたいとその意見に感謝・賛同し、校内展示会の終了後、一部の作品であったが中学校において展示会を開いた。安佐郡小河内中学校（現在は広島市清和中学校に合併）、山県郡吉坂中学校、都谷中学校、佐伯郡水内中学校、と続けて移動式に展示会を催した。

当時は定期便のバスが唯一の運搬車で、車体の後尾にはバスケットのような荷台があり、それに展示品を入れて運んだ。宿泊は常に在校生の家庭で、夜はその地域の父兄懇談会を開き、生徒の近況報告や、その他の連絡事項等について話し合い、時の過ぎるのを忘れていた。また、展示の準備、来客の接待等については父兄が中心となり、中学校の先生の応援をいただき、各中学校とも盛大に展示会は開かれた。

郡部では、十一月も中旬を過ぎるとすっかり冬の気候と変わり、作品展示室にも中央に直径一メートル以上もあろうかと思われる大きな火鉢が座り、私どもはその赤々と燃える火を囲んで、中学校のご父兄の方々に本校の教育方針や寮生活の実態等について説明をした。その後、年を重ねる毎に入学生は増加し、入学希望者も山県郡、安佐郡、佐伯郡とも全領域にわたった。

卒業生の社会進出は目ざましく、教育方針に則り、専門を生かし第一線で大いに活躍した。その卒業生の活躍により、広島県可部女子専門学校は広く社会一般に認識されるに至ったのである。

校長先生はその後、社会の要望に答えるために、実力に資格を併せた高等学校の新設にと努力された。そして広島県可部女子専門学校を母体とした学長の教育方針に則った広島文教女子大学は、今や全国に知られるところ

となり、学生もまた全国から学風を慕って集まり、日々学問の研鑽に努めている。

教育一筋に生命をかけて、学校とともに生きてこられた学長先生も八十歳を過ぎられた。娘時代から学長の足手まといばかりしてきた私としては、唯々一日でも多く永生きされ、いつまでもいつまでも学園の発展のためにつくされんことを切望する次第である。

（武田学園評議員・元広島文教女子大学附属高校教諭）

ベットからの陣頭指揮に感激

児玉　富美子

私が広島県可部女子専門学校の洋裁教師として赴任させていただいたのは、昭和三十年四月でした。

当時、学校は国鉄可部駅に近く、二階建ての新築校舎が一棟と、中庭を挟んでもう一棟、これはまた、いかにも明治の名残りを思わせる鄙びて素朴なものでした。しかし板の間はよく磨かれていて、清潔さの滲み出た、なかなか趣きのある校舎で、今でも懐かしく想い出されます。

この古びた校舎の中央部に、校長室兼職員室がありました。向って右側に事務室と教室が一つ、左の方に二教室が続き、時によりこの二教室は仕切りが外れて講堂に早変わりしていたように思います。

何といっても、当時を知る人ぞ知る、私の脳裏に深く焼ついていることは、本学園の創立者武田ミキ校長が、この職員室の正面にベットを構え、ご不自由な体を横たえながらこの場所を職場とも住居ともなされて、女子教育のために陣頭指揮にあたっておられたという偉大なる事実です。朝は寮生の朝礼に始まり、舎生の生活指導はもちろん、職員生徒の苦情聴取も慈母の如くに、学園にあっては朝の職員集合から夕方の職員会議まで――あるいはベットの上で、時には部屋の外にそっと出て、ご訓示や学習指導に至るまでの校務はお忙しく、また訪問客の応待や学校経営のためのご研究など、かたわらから見る目も涙ぐましいご活躍振りでした。また、常に質素・倹約を旨とされ、自ら更生服をご着用、堂々と、にこやか

なる様は、ただただ感服のほかはなく、先年、中国文化賞を受賞なされたゆえんも当然のことと、陰ながらお慶びした次第です。

武田学園の特色は、精神主義をモットーにした婦道完成のための総合教育でしたので、特に被服科は全学級を通じ二週間を一単元として、和洋裁交互に科目集中授業が行われていました。そのため、他の科目の学科は被服の授業の合間を縫うように時間割が仕組まれており、その科目の時間になると、生徒たちはそれぞれの教室の授業に行きます。終われば被服の教室に戻れるわけで、技術の習得のためには非常に能率的で、この教育方針はすばらしいと思ったのです。

私の担当しました洋裁では、最初、基礎技術を充分しますので、本科一年の終わりにはツーピースが一人で縫えるところまで上達します。そして本科二年になると、早速、新入生の制服仕立てに取り組むのです。ここで初めて人様の物を手がけるのですから、生徒たちは真剣そのもの、汚さないように、丈夫にと神経の使い通しで——やっとできあがった時のうれしそうな表情——共に喜んだのも昨日のように思われます。

夏といえば、暑い日ざしの廊下で、寄宿生や日直生と盆灯ろうを作った経験もあります。またバザー用の人形製作を夢中で指導した事や、洋裁の裁屑を更に小さく小さく刻んでクッションの中袋に詰め込んだことなど、学園資金の協力も自らの手でと、心もはずんだ生徒たちでした。このような作業が度々ある事によって、技術を習得し、働く智恵を覚え、集団することによって和の精神も高まったのではないでしょうか。

思えば、秋の文化祭は大変なものでした。来期新入生の獲得のためにも、学校をアピールする必要があるからです。そのために、展示作品に最大の力を注いだものです。校長を中心に、徹夜をする者、創作的・研究的にと教師たちは、生徒に拍車をかけながら、意欲を燃やし精魂を傾けたものです。いよいよ明日という日、夕方になってもまだ完成しない様子をご覧になった校長先生が、大声でお泣きになったことを忘れる事はできません。本

当に心配をかけたものです。しかし文化祭の終わった直後、会場をおまわりになった校長先生から「いま壊してしまうのは惜しいですね。このままもっと置きたいでしょう。」と、労いのお言葉を頂戴した時は、うれしくて涙が出んばかりでした。校長先生こそ、どんなにお疲れになっていた事でしょう。

厳しい中にも慈愛溢れる教育を受けた当時の生徒たちは、今は立派な社会人として、また家庭の主婦として強く逞ましく生き抜いております。どんな事があっても挫けない人生を歩むと思います。

（元広島県可部女子専門学校教諭）

昭和三十年頃の記録

升味　美佐子

昔、私が受け持っていたクラスのアルバムを開いて見た。高校第一回の卒業アルバム「若い日」は一九五九年であるから、今から二十三年前である。私が奉職したのは、それよりも四、五年前であるから、昭和三十年頃かと思う。当時は広島県可部女子専門学校と称していた。終戦後十年余経ていても、戦後の痛手は多分に残っており、私の家庭においても開拓地へ入植した間もない時で、四人の子供を家に残しての別居生活であったが、当時の人はお互に一生懸命に生きていた。まだ田舎には旧正月を祝う所もあり、寄宿舎の生徒は新正月と旧正月とに分れて帰省していたように思う。

当時、全寮制にした教育をという気持ちも多少あったように記憶に残っているのであるが、生徒募集には、全県下の比較的教育に恵まれない地域や、県境の島根県の方まで先生方が手分けして出かけた。学園の特色を自信をもって説明し、卒業後は直ちに社会に役立つ人間になるということを話した。卒業生はその通りであった。

その頃の寄宿舎の諸費用は金銭でなくてもよく、農産物を代替にしてよかった。寄宿舎生は大変従順で、学園の卒業生である舎監の先生も献身的によく働かれた。当時の寄宿舎生は百人余であったが、炊事当番に当った者

は、朝三時頃から起きてお弁当作り、朝食作りとよく精出して働いたものだ。

ある時、こんなこともあった。学校の御手洗いが一杯になって困り、学校が始まる前までに肥汲みをした。しかし、そんなことしなくてもよいと非難を受けたのだ。また高校建設当時は、朝早く起きて運動場脇の竹やぶの伐採をした。朝四時になると、きまって当時の校長武田ミキ先生は舎監の先生方を起こしに来られる。「升味先生！」と外からまず私を呼ばれる。舎監の先生方を起こすのは私の役目、これがまたつらい。なかなかすぐには起きられないからである。夜も遅くまで仕事をなさるし、朝眠いのは無理からぬこと、でもみんなよく働かれたものだ。段々と東の空が白み夜が明けてくる。朝食前の一仕事は大変気持ちよく、壮快であった。また、私はモンペをぬぐのを忘れて、そのまま教室に出て生徒にワッと笑われて気づいたこともある。

寄宿生は通学生に比べて学校建設のための作業に動員されることも多かったのであるが、それに従順に励んだように思う。また学校においても、ある時は授業を返上して作業にあてたこともある。授業をさぼってまで作業しなくてもよいのに、と先生方も生徒も思っていた。私もそうだと思った。しかしやらねばならぬ時だってある。何も授業ばかりが教育ではない。私の受持ちのクラスはよく理屈をいって私を困らせた。しかし、ある日私を驚かせてやるといって全員が豆絞りの手拭いで鉢巻をし作業に参加してくれた時は、大変に嬉しかった。今もその豆絞りの手拭いは持っている。

人生は意気に感じる、理屈ではない。

雨の日には、雨の日の生き方があるという。

そうだ、いつも晴れの日ばかりはない。今、その時々を真剣に生きた武田学園三十五周年を迎えて、ほんとうに感無量に堪えない思いでいる。

私が奉職した当時、校長の武田ミキ先生は、職員室の一隅をカーテンで区切って、そこにベッドを置かれてご指導なさっておられたが、あの当時ギブスをはめておられた先生が、その後段々とお元気になられ、若い人をし

のぐ程の活気を持って行動される姿に、ほんとうに敬服する。

昨年の同窓会の時には、新校舎はほぼでき上っており、それを私たちに見てもらいたいばかりに、先生は真っさきに上の高校まで上がられ、後から続いて上がって来る者たちのために涼しい風を部屋に入れてやらねばと、一階から三階まで一つ一つの教室や廊下の窓をお開けになった。帰りにはまたいちいち閉めて帰られるという具合に、相変わらず何事も率先して範を示される先生のお姿、また暖かいそのお心に打たれた。これこそ武田学園の姿と同じだなあと、つくづく思った。

私立学校は、他の公立学校と違い、公からの規制もなく、私学としての特色ある教育ができて、その点自由である。学園訓、〃勤労を愛する人になりましょう〃も教育の中に織り込めるわけである。私の家の近くの中学校では、毎朝掃除をする年配の女の人が出勤して、校門の囲りを掃いている姿を見かける。近頃は、生徒は掃除はしないのだろうか。自分たちの校舎を、他人に掃除してもらっているのだろうか。その他、校門の出入り、教室の出入りの作法など、テレビなどで見る限りでは、そんなことはどうでもよくなってしまっている時代だ。武田学園の生徒はどうだろうかと、この頃私はしきりに考えるようになった。

今年の夏の同窓会に招かれて出席し、昔の校訓をなつかしく思い出し、また校歌をその昔に返って歌った。どうか、古き良きものはますます良くして代々受け継ぎ、日々新しく成長されるよう念願する。

（元広島県可部女子高等学校教諭）

新校舎に身をもって感じたこと

谷本敏枝（旧姓福井）

あまり明るくない職員室の一角にベッドを置かれ、そこに臥せって、戦後の荒廃した女子教育について熱心に語ってくださる武田校長先生。私はこの先生に魅かれて、昭和二十九年卒業と同時に勤め始めました。

当時、広島県可部女子専門学校は、古市にありました。実家からは通勤できず(岩国だったので)、寮で生徒と一緒の生活を始めるようになりました。当時の生徒はほとんど寮生活のようで、朝早く起きて規則正しい生活を送り、特に古ぼけた校舎でもピカピカ黒く光るぐらいに掃除をしていました。それから間もなく可部の校舎に移り、古市よりは学校らしい学校に入れると、本当に嬉しく思ったものです。

私の専門の食物の調理室にも、器具その他少しずつ買い入れてもらい、早く設備の良い所で充分に勉強してもらおうと思った矢先に火災に遭ったのです。四月は新学期でいろいろな調理器具を買い入れていた時だけに、一つも焼きたくないと思い、隣りの大和重工の人たちに手伝ってもらって外へ運び出しましたが、これは思い出したくない想い出の一つです。

それから、現在安佐市民病院が建っている所に新校舎が建つ事になり、私たちも少しでも手助けをと、土を風呂敷に包んで運んだり、モッコでかついだり、早く立派な校舎を建ててもらいたい一心で作業をしたものです。余談ですが、あの時は本当に辛く〝どうしてこんな事までせねばならぬのか、教員なら授業をすれば良いのではないか〟などと思ったものでしたが、それがそれから後現在に至るまでの私が生きていく上でどれだけ役に立ち励みになったことか、〝若い時の苦労は買ってでもせよ〟の諺どおりと思っています。

新校舎を建てる時は、一応私に設計等をまかせていただき、私なりにいろいろその方の勉強をし、ライト一つ選ぶのにもあちこちかけまわってみました。いよいよ新校舎が落成し、そこでの授業は毎日毎日がバラ色で、生徒共々楽しく学んだものです。

昭和三十四年に、結婚によって兵庫県の方へ行くことになり退職したのですが、その間、三回受け持ち、学園祭・修学旅行・体育祭・遠足等一つ一つがとても楽しい懐しい想い出となっております。

あれから短期大学、四年制大学、幼稚園等めざましい発展を遂げ、胸を張って〝私も武田学園の先生だったの

ですよ〃といえる事に誇りを持っている今日此頃です。

（元広島県可部女子高等学校教諭）

誠は天に通ず

野村　美年子
（旧姓古井）

昭和三十年、私が手芸教師として奉職しました当時は『広島県可部女子専門学校』と呼び、二年課程の本科、一年課程の研究科、師範科がありました。生徒数も二百五十人前後で職員数も少なく、武田ミキ校長を中心に家庭的な暖かい雰囲気があり、和裁洋裁の技術と共に礼儀作法、教養を身につけ、心身共に磨かれる学校として世間に知られていました。このような学校に縁あって計六年間も勤めることができた事を、大変嬉しく思っています。

当時、校長先生はカリエスという難病を背負われた身の上で、職員室の上座に質素な板のベットが備えてありました。そして何時もギブスベットに仰臥された姿勢でのご指導でした。食事も三度ここで召し上がられました。ベットの前にはカーテンが張ってあり、少し気分の良い時はみんなの姿が見えるようにカーテンは開かれていました。こんな大病と闘いながらも教育一筋に、「誠は天に通ず」と教育に対する熱意を燃やし続けておられました。こんな中で、年二回床を離れられる日がありました。それは卒業式と入学式でした。そして「金剛石も磨かずば」の歌と「誠心誠意」「努力すれば必ず花が咲き実を結ぶ」という言葉を信条として話されていました。こうした学校にいて、多くの面において学び教わるものがありました。

学園生活で一番懐かしく思い出されるのが学園祭です。就職して最初の年は、担当する手芸教室の作品や展示方法等をどのようにしたものかと思案し、必死の思いで取り組みました。舟に乗って漕ぎはじめた自分ならば後には引けず、向こう岸に着くか否か判らないが少しでも近づくようにもう漕ぐしかない、一所懸命ただ漕ぐしかないと心に決めてがんばりました。生徒の気持ちも同

じであったと思います。

日本刺繍をした夏休暇は、夜を徹し作品に取り組みました。随分無理もし苦労も多かったでしょうが、生徒はよく耐えてくれました。卒業生の先生方、寮の先生方には多大のご協力をいただきました。お陰様にて、松に鶴、虎、山水、鯉等の軸物や額など一針一針に心をこめた作品は、素晴らしい出来栄えで目をみはるものがありました。

また三十二年度より高等学校が増設され、校地は中島地区に求められました。その運動場整備では、校舎敷地より一段低い水田あとに根の谷川から運んだ石を排水用に敷きつめ、その上に砂土を何日も何日も〃チリも積れば山となる〃の諺どおり自分たちの手と体で完成させました。そのグランドで運動会を挙行しました。

こうしてふり返ってみますと、辛かった事、苦しかった事程今は懐かしく、青春の思い出の一ページとして走馬灯のように頭の中をかけめぐります。担任したクラスの生徒には、何も力になる事はできませんでしたが、時折り便りや姿をみせてくれることを大変ありがたく思っています。

現在白い校舎は緑の高台にそびえ立ち、五十四号線からもすぐ目に止まり、以前にも増して良い環境に建てられています。これも、学園長先生の一心にこめられた誠が成就されたものと、衷心よりお喜び申し上げます。

（元広島県可部女子高等学校教諭）

風呂敷一杯の土

西山好江（旧姓河野）

私は昭和二十八年四月、広島県可部女子専門学校本科に入学しました。学校は古市にあり、昼は教室、夜は寄宿舎に使うという、コの字型になった古い校舎でした。一年三クラス、二年二クラス、研究科一クラス、師範科数人というなかで、寄宿生として一年間、二年生になって可部駅裏の中原小学校跡の校舎に移り、研究科、師範科と進み、卒業後三十八年末まで勤めました。約十年間

武田学園にて、公私共にご指導いただきました。

その中でも、とりわけ印象に残り、毎年の同窓会で思い出話になる苦しかったことの一つに、運動場の整地作業のことがあります。バケツ、竹み、風呂敷などで、始業前や体育の時間や放課後と一日に何回となく太田川へ行っては、石や砂を運んだものです。現在のようにダンプカーやブルドーザーにはお目にかかれず、唯一の文明の力は、業者に頼んだ小型トラックでした。数人はこのトラックで積み込みに可部温泉の裏山へ、数人は校庭で降して整地、残りのものは風呂敷で太田川へ、手に豆ができて痛い痛いといいながらも何カ月かがんばりました。風呂敷も二～三枚は破れてしまいました。そうしてようやく完成した運動場で白線を引いて、運動会が盛大に行われた時は、とっても喜んだものでした。

「なせばなる、なさねばならぬ何事も、ならぬは人のなさぬなりけり」の教訓をいただいたのはこの時だったと記憶しています。もう二十数年も前の話になりますが、今ではその土地の上は国道五四号線となり、自動車が大きな地ひびきをたてて走っています。

そして昭和三十二年の四月には校舎が火災にあいました。その時も先生・生徒が一丸となって復興にがんばりました。私たちの手で何か協力できるものはないかと考えて、近くの農家へ田植えの手伝いに行きました。幸い寄宿生は農家出身者が多かったので、放課後十五人とか二十人とか手わけをして出かけ、大変喜んでもらいました。また秋の作品展示会ではバザーを開き、食堂はもとより、手作りの一休さんの人形は、評判が良く売れゆきも上々だったようです。

そうした風呂敷一杯の土が、一体の人形が基となって、中島の校地へ校舎へ、上原の大学へ高校へ幼稚園へと発展し、現在のような立派な学園になっていったのです。その姿を見るにつけ、苦しかった当時が懐かしく思い出されます。と同時に、理事長先生をはじめ、先生方、生徒の皆さん、また関係なさった方々のご努力の偉大さに感動し、母校がますます発展するようにと祈らずにはいられません。

（元広島県可部女子高等学校教諭）

病の床の教育論

空　フミコ
（旧姓山中）

私が武田学園に勤務したのは昭和二十六年から二十八年で、三十年前でした。私はまだ大学の三年生で、非常勤講師でした。当時は広島県可部女子専門学校といっており、和裁、洋裁、茶道、華道などの技芸を中心とした学校でした。学校の場所は、安佐郡古市町の河畔にあったように思います。

私にとって一番印象に残っていることは、最初に校長の武田ミキ先生に面接に行った時のことです。どんな学校だろうかと思いながら、古市橋でバスから降りて田園の中を探しながらみつけた校舎は、どこかの工場の寮を改造したもので、畳の部屋も多く残っていました。職員室も畳の部屋で、その奥に武田ミキ先生が木のベットに横になっておられました。そこで、先生と勤務について話し合いをしましたが、私は大変な病の床に臥す身で学校経営しようとされている先生の教育熱にすっかり感激してしまい、がんばらなくてはという気持ちと、まだ学生で未熟者が教壇に立つことの重大さで緊張させられました。そのため、当時は広島郊外であった向洋に住んでいて通勤条件がかなり厳しかったのですが、年二回の試験の日以外は欠勤することなく、二年間続けることができました。

今考えてみると、私は英語が専攻なのに大それた事をしたもので、英語、国語、音楽、の三教科を教えました。でも音楽は何よりも好きで、ピアノと声楽を勉強していたし、大学のクラブが合唱団だったので、自分の好きな歌をオルガンを弾きながら楽しく生徒と歌いました。そんなことで、その時に校歌も私の知人で元熊野第四小学校長の福岡孝義先生に依頼して作曲してもらう事になりました。国語は高校の教科書なので高度なものもあったので、教材研究を一生懸命にやり、自分自身の勉強になったように思いました。

そんな大変な先生でしたが、生徒は県北出身が多かっ

たと思いますが純朴でしたので、洋裁、料理、手芸、茶道、華道など技芸を中心としたもの以外の国語や英語もよく勉強してくれました。あの真剣なまなざしは今も忘れることができません。

生徒に関してもっと印象深く思ったことは、非常に礼儀正しく、廊下を歩いていても、座って手をついて挨拶され面食らうことがありました。

当時の学校の方針として、全員に基礎的な学力を保障しようということで、一人ひとり手をとって教えられ、特に遠方からの生徒は寮に入れ充分な時間を利用して徹底指導が行われていたように思います。先日、その当時に私が紹介して武田学園で学んだ生徒のお母さんと話す機会がありましたが、「娘は末っ子で何もできない子だったが、寮で非常に先生に可愛がられ、よく教えてもらったので、何でも一通りの事はできるようになり、本当にありがたい事だった。私はあの学校を神さんのように思っていますよ。」といっておられ、二十数年たってその言葉を聞き、よかったと思いました。

私は大学を卒業して中学校の教職につきましたが、あの二年間の経験は非常にプラスになったと思います。私が三十年前につたない教べんを取らせてもらった学校が、その後先生方の努力で今日の広島文教女子大学にまで発展していくのをみて、とても嬉しく思うと同時に、安佐地区・県北に文化の花を咲かせる原動力になる女性に、学問の道が開かれたことはすばらしいことだと思います。

超スピードで進歩する科学時代に、人間が人間らしく生きるために、それを育てるのは家にあって母親が重責をもっております。また自分だけがいい思いをするような人間でなく、みんなが幸せになれるような考えに立つ人間を育てる女性として、創立当時のあの地道な歩みの上に、広い視野で未来を展望できる理性と真理が追求できる学園として発展されることを心から祈っています。

（元広島県可部女子専門学校非常勤講師）

教材がない時の教科書作り

長野　百合子
（旧姓大原）

私は昭和二十六年四月、武田学園に奉職いたしました。当時は、戦後の物資不足が尾を引いている時代でしたので洋裁を教えるにしても教材がなく、唯一の指導法としては黒板を利用するという非能率的なものでした。

ところが、製図、裁断、縫方説明などは、黒板だけではどうしても説明不足です。何か良い方法はないかと話し合った結果、垣内先生が一年生用、私が二年生用の『本』を作ることになりました。気軽に引き受けたものの、就職して間もない私は指導方法も未熟で、明日の授業計画を立てるのでさえ四苦八苦していました。そのため教科書作りは大変でした。ほんのわずかな時間があると、すべて教科書作りに充て、日曜日がくると、垣内先生と横川にある『孔版社』へ行って印刷するという生活が何カ月も続きました。そうして、ようやくできあがった本を手にしたときの感激を忘れることができません。今までの苦労が報われたような気がしました。いろいろと改良すべき点もたくさんありましたが、その時は成就感で一杯でした。

また生徒募集のため、移動展覧会を開いたこともありました。移動展覧会というのは、武田学園の生徒の作品を各中学校へ展示させてもらい、学園をもっとよく知ってもらおうというものです。日頃から、生徒たちは、日曜・祭日を問わず学校へ来ては縫っていました。ましてや展覧会の作品を作るとなると、誰も彼もが時間を忘れて一生懸命縫っていました。学校にいる私は、ちょっと見てあげようと思って入っていくと、帰れなくなることがたびたびありました。しかし、今のようなジクザグミシンやロックミシンなどなく、ドロンワークやカットワークなど一針一針縫うという根気のいる仕事でしたが、すばらしい作品がたくさんありました。その時に、私のものを縫っていただいた作品は、色あせた今でも、その生徒の労を思えば捨てる気にもならず、大切に保存しています。

その頃の先生としての私の生活を振り返ってみます。今も昔も洋服は流行がつきものです。ましてや戦後間もない時代で、どんどん新しい物が入ってくるので、今日は今年流行の製図の講習会、明日は人形作りの講習会、次は帽子作り、造花、マクラメ編、男性用の製図と裁断というように、私は忙がしい日々を過ごしていました。しかし生活は苦しく、毎日の食事の献立は小田先生の実家からいただいた玉葱とジャガ芋の料理ばかりでした。二人で出し合って初めて買った一個二十五円の夏みかんの味は忘れられません。その頃は、給料は少なく、また残業手当というものもなく、身内からの援助など思いもしなかったことです。

それまでよく肥えていた私は、兄弟友人から「セメントダルのように横にころがした方が早い」といわれていましたが、馴れないことばかりの連続で、四カ月で十キロ余りやせ、今まで着ていた服がみなダブダブになってしまいました。そして、二十年間病気一つしたことがなく体の丈夫なのが取柄だった私ですが、時々病院へ通うようになり、とうとう長期欠勤もしてしまいました。先生方や生徒の皆さんに迷惑をおかけして申し訳なく思ったものでした。

現在は、優しい主人や子供達に囲まれ、幸せな家庭を築いています。

現在の学園が、快適な教育環境と近代的な設備が数多く設けられていることは喜ばしい限りで、教育効果のうえで必ずや目をみはるものがあろうと思います。名実ともに立派な学校として成長し、限りなき前進を期待しております。

（元広島県可部女子専門学校教諭）

社会人への第一歩

西岡幸子

光陰矢の如しといいますが、初めて奉職した昭和三十三年頃のことを思い出します。あの頃の学園は可部駅の裏手にあり、今よりも小さな学園でした。その中で女性教育に全力を傾注される先生、この学園で勉学に励む生

徒、でも私自身その中に溶け込めないでいました。

そんな時、ある昼過ぎの大火でした。今思い出しても夢のような一日でした。校舎は焼けたが授業は続けなければいけない。あらゆる教室を授業のできるように、寮生の部屋も昼は教室に、寮も亀山役場の跡を借りての生活でした。臨時の教室も、荷物があるのでそれを見えないようにするためにカーテンで仕切り、今では考えもできないような不自由な教室で、黙々と授業をしていました。また授業のあいた先生は、黒く焼けた柱や板を片付け、朝夕は寮生も手伝いに精を出し、皆んな手を真っ黒にしながらの作業でした。いつもその先頭に立っておられるのは、校長先生でした。まだ体が不自由でした（コルセットを付け、寝たり起きたりの生活）が、あらゆる面に気を配られ、悲しみの中からの〃再出発〃、学園の再建に全力をあげられる姿、これこそ私にはよき教訓でした。

学園の皆が新しい校舎のできるのを心待ちにしていました。そしてやっと可部町中島に（現在の安佐市民病院）普通教室の校舎が落成した時は、喜び合いました。校舎はできても、その周辺は田と畑と竹ヤブで、家といえば農家がポツンポツンとあるのみの淋しい所で、私たちはその田と畑を慣れない手で耕作したものです。

続いて特別教室ができることになりました。敷地に土を入れることになり、全員でスコップ・鍬・木箱等あらゆる道具を持ち出して土を運び、やっと特別教室が落成しました。校庭も同じで、皆の力で広くしましたが、そこは竹の根や木の根のたくさんある所で、手のあいた先生や、朝夕は寮生・寮の先生で竹や木の根を掘り、土を運び、一日でも早く運動ができるようにと、今ならブルドーザー等の機械のする作業を、皆んなの手で「人間ブルドーザーよね。」と話して働きました。

ある時は、運動会に国旗をあげる掲揚台がないので、前日の夕方から校長先生と寮の先生たちで力を合せて竹の根を掘り、長い竹を持って来て大きな石を寄せ集め、夜中までかかって完成し、手をとり合って喜び合いました。その掲揚台が、当日の運動会に立派に役立ったことは、今でも忘れることができません。

何といっても建設中の学園でしたので、校訓の如く〝勤労を愛する人〟〝実践力のある人〟〝謙虚で優雅な人〟と、みのりある日々でした。そして、先生・生徒共に苦労の多い時代でした。それだけに強く結び付いたものがあったように思います。私も若かったので懸命に打ち込めたので、喜びも苦しみも思い出も多かったのです。その後、体育館、寄宿舎、本館と次々に建ち学園らしくなりましたが、私はその本館には入ることなく去りました。私の教師生活は数年でしたが、生涯のよき思い出として、現在も生きています。

（元広島県可部女子高等学校教諭）

女性像「外柔内剛」

中村増子

私が学園に奉職しましたのは、昭和三十六年四月から昭和四十年の七月までの四年あまりの短い間でしたが、私の教員生活の最後でありました。子供を持ってからの再就職の場でもあったし、大変に思い出深い四年間でした。現在住んでいる家のすぐ前に宮崎商業高校があり、年中さまざまな行事といつも生き生きと躍動している生徒を見ながら、学園をしのんでいます。今でも目を閉じると、校舎の姿がすみずみまで浮かんできますし、ともすれば、口ずさんでいるのは〝太田の清き川水に……〟というメロディーなのです。

昭和三十六年からの四年間といえば、学園の画期的な発展の時期ではなかったでしょうか。高校も家庭科、商業科だけでなく、普通科も増設され、続いて短大の設置があり、それに伴って、本館に続いて西の理科・社会科校舎、南校舎、体育館と次々に建ち並んで、まさに驚異的な躍進ぶりでした。特に四階建ての本館は、一階から四階まで見事な設備が充実していた事でも有名でした。

当時としては珍しい設備の整った放送室、階段教室、相談室等、補導部を担当していましたのでなつかしく思い出されます。四階には鏡をはりめぐらせた整容室、ずらりと、本がたち並んだ広い閲覧室を持った図書室、屋

上からは風光明媚な太田川が見渡せて浩然の気をみなぎらせてくれました。

そして週番の時、校舎のすみずみまで見廻るのに骨が折れ、見落しがあったりして、次の月曜日に校長先生からお叱りを受けたことも今から思えばなつかしい思い出です。

さまざまな行事の中でも、特に学園祭と呼ぶ文化祭の盛大なことは、すばらしいものでした。特に家庭科の被服・手芸部門では、相当レベルの高い作品が数多く展示され、即売もあって、私の母など毎年それを楽しみにしていた程でした。その他、運動会、遠足、入学式、卒業式、入学試験……等々、どんな小さな行事でも実に綿密な職員会議があり、打ち合わせをして校長先生を中心として学校中一丸となって事に当たったことは、今でも強く焼きついている印象です。

生徒の教育では校訓に強く打ち出されていて、「外柔内剛」の女性像は、私も一生の座右の銘としているものです。

現場教育を強調されましたことは、ただ単に生徒だけでなく、若い女の先生方にも随分と大きな教訓となりました。あの広い校舎のすみずみまできれいに掃除が行き届いていましたし、すれ違う生徒たちもきちんと立ち止まって会釈し、マナーもりっぱでした。

また、高二の家庭科の一生徒が、授業中に急死するという不幸な出来事がありました。その時の校長先生はじめ保健の先生、担任の先生たちの温情あふれる処置のなされ方、またなきがらを家に送る間の二時間足らずのあいだに、クラスのみんなで縫いあげた白いきものを着せて、全校生徒の整列している中を霊柩車で送ったことも忘れられない思い出でした。

一生を通して、女子教育に捧げられました武田ミキ先生の気迫は、学園のすみずみまで浸透していました。私は家庭と職場の両立に、時には悲しくつらい思いもしましたが、こんな時、実の母親のように励ましてくださいました事を、今改めて思い出し、ありがたく感謝しています。また先生の教訓の一つである

「為せば成る、為さねば成らぬ　何事も、成らぬは人の為さぬなりけり」

これは、私の人生に大切な教訓として生きつづけております。　（元可部女子短期大学附属高等学校教諭）

坊主頭の頃

柳沢勝彦

私と学園の出会いは、創立者の武田ミキ先生にお会いしたことにあるといっても過言ではありません。四十二年春、附属高校に勤務、四十八年の三月まで六年間お世話になりました。月日のたつのは早いもので、北海道のオホーツク海とサロマ湖の雄大な自然に恵まれた湧別町教育委員会に社会教育主事として勤務するようになり、十年になろうとしています。

学園一年目は、事務職員兼務でスタートしました。中島の淳風寮の他に、竹林荘や旧寮のあった頃です。被服校舎（後に焼失）の二階宿直室に寝泊りし、食事は寮で食べさせてもらいました。宿直は、週番の先生から鍵板と日誌を引き継ぎ、夜間に校舎と寮を見廻るのが任務でした。巡回中、本校舎の校長室に灯がついているので声をかけると、先生は「先に休んでください。」といわれ、いつも遅くまで仕事をしておられました。朝寝坊のため、玄関の鍵を開け忘れ、あわてて飛び起き、階段を踏みはずしたこともあります。最初の係は営繕係でした。見よう見まねで学校寮の小さな修繕を担当しました。ガラス切りは難しく失敗の連続でした。冬になるとストーブの修繕が専門でしたが、ミキ先生は寒中でも火鉢で暖をとっておられたものです。校舎裏の焼却物を整理し、学校から出た反古紙等を集め売却するのも大切な仕事でした。

母が倒れたとの知らせを受けた時、ミキ先生は「飛行機ですぐ帰りなさい。」といい、みんなで旅費のカンパをしてくださったご好意は今でも忘れません。秋だったと思いますが、ミキ先生と職員の先生方と亀山の家へお手伝いに行ったことがあります。休み時間に、オニギリを

食べたあとミキ先生を囲み「ここは御国の何百里……」とわらべ遊びをしたこと、渋ぶ柿を食べたこと、車がこなくてミキ先生と月明りを頼りに、ふもとまで歩いたこと等、懐かしい想い出がたくさんあります。

上原に淳風寮の新寮ができ、風呂が大きいというので先輩と入浴に行き、うっかりして上がるときに水と思いバケツ一杯の熱湯を肩からかけてしまい、火傷を負ったので先輩がバケツの水をかけかけ、車で病院まで運んでくれました。治療を受け、当時の校長住宅の離れで療養させてもらい、ミキ先生始め皆さんの看病のおかげで元気になりました。このご恩は生涯忘れません。休んでいる間、先生方生徒たちの心あたたまる激励・見舞を受け心強い思いをしたものでした。

似島中学校へ生徒募集に行き、翌年一人入学者があり、初めてのことなのでとても嬉しかったものです。

二年目に被服科三年B組の担任となりました。生徒たちは新米の私を困らせもしましたが、クラスの和を求めて、よく協力し助け合い一生懸命努力したあの顔この顔が浮んできます。半数が寮生なので家庭訪問をしましたが、坊主頭に野球帽、運動靴をはいていたので、牛乳屋さんや米屋さんとまちがわれたものです。三年目が被服科一年B組でした。素直でまとまりのある明るいクラスで、三年間受け持ちました。修学旅行のこと、万国博のこと、楽しかったこと、苦しかったこと、悲しかったことなど、生徒一人ひとりの顔を思い出します。欠点だらけの私と、よく一緒にがんばってくれたと感謝しています。

四年目からだと思いますが、可部の街に下宿を求め、毎日根の谷川沿いを歩いて通勤したものです。自炊をするつもりができなく、外食ばかりとなってしまい、一日二食が平均でした。遅く帰ることがあり、蛍をよく見かけたものでした（北国では見ることができません）。六年目、生活が不規則だったため身体をこわし、県立病院に入院してしまいました。一種の栄養失調でした。先生方にはすっかり迷惑をかけてしまいました。

退職後、毎年春になると北海道まで来たついでにと、

卒業生がよく訪ねてくれました。中には、新婚旅行ということで二人で訪ねる卒業生もいました。また、何人かの先生方にも再会することができました。そして、ミキ先生が旅行に来られるということで層雲峡温泉まで行き、お会いできたことがとても感激でした。

三・四年前、広島へ寄る機会があり学校を訪ねました。可部の街も学校もすっかり変わってしまい、浦島太郎のようでしたが、先生方と再会することができ、同窓会、クラス会にも出席できました。ミキ先生のお宅に泊めていただき、懐かしい昔の武田学園時代に触れることができました。

「太田の清き川水に……」

「勤労を愛し、逞しい実践力のある人になりましょう」

武田学園魂が私の日々の生活の中に生きているような気がします。

（元広島文教女子大学附属高等学校教諭）

広島・文教……私の原点

田村栄一

離任してちょうど十年。ふとした折々に心に浮かぶのは、初めて「広島文教女子大学附属高等学校」の正門前に立った時の自分の姿ですが、それは多分、のちに勝手に自分で作り上げたものでしょう。しかし、なぜか不思議に印象深くいつまでも心の隅に残っております。襟元がやけに寒々として、体中がふるえているような感じがして、逃げ帰りたいような不安が体中を包んでいたことを忘れることができません。それから四年半余り、何もかもが全て勉強であり、本当に貴重な年月を送りました。

同和教育のこと、組合結成のこと、学校移転のこと等々……、連日の職員会議や人間関係の様々を含め、十年前の当時の一コマ一コマは貴重な体験だったと思います。若い生意気盛りで世間知らずな私を、曲がりなりに

も教師として自立して行けるように育ててくださったことに、深く深く感謝しております。

武田ミキ学長先生には生徒への愛と誠意を、また当時の内海校長先生には教師としての姿勢を、宮本教頭先生（当時）には公私にわたって親身になって面倒をみていただき、社会人としての在り方をお教えいただきました。教育レベルの高い広島で学んだ数々の事柄は、教育後進県といわれるこの高知で、ややもすると惰性に陥りそうな自分を支え、常に教師としての物の見方、考え方の基本を示唆してくれているように思えてなりません。

こうした数え切れない懐かしさの中でも、クラブ活動での『弓道部』は、私にとって何物にも変えがたい宝といえます。根の谷川沿いのあの弓道場は――トタンぶきの屋根、秋のトンボ、雪の冬、来る日も来る日も続いた深夜までの練習――「古き良き時代」のクラブ活動というには余りに寂しいが、あの弓道場こそ、私にとっては記憶の底にいつまでも消えることのない「私の原点」です。多くの生徒らと過ごした日々が思い起こされ、全身全霊を傾けることのできた幸福を、今しみじみと懐かしんでいます。初めて行ったインター・ハイのこと、初めて出た国民体育大会で準優勝できたこと等々……私にとって本当に大きな財産を与えてくれました。

山紫水明の地、空いよいよ碧く、地は光にあふれ、誠の精神の生きつづける「文教」に四年余を過ごした事は、本当に幸福でした。

（元広島文教女子大学附属高等学校教諭）

好きな洋裁を

重間　とみえ
（旧姓大下）

私が、母校の武田学園に入学したのは今からちょうど三十年前、まだ学校が各種学校広島県可部女子専門学校として安古市町にあった時です。校舎は木造二階建ではありましたが、現在のような立派な校舎とはほど遠く、しかも昼は学校、夜は寄宿舎として二重の役を果していました。運動場といっても名ばかりで、ちょっと広い庭

のようなものでした。それでも運動会と称してダンスをしたり、いろいろな競技に技を競ったものです。年間の最大行事であった学園祭も、楽しかった思い出の一つです。展示作品の作成に夜を徹したこともありました。当時は交通の便も少なく、家から可部駅まで四・五キロの道のりを毎日テクテク歩いて通学しました。

そもそも武田学園へ入学希望したのは、当時の本科（二年）、研究科（一年）、師範科（一年）と進んで好きな洋裁を勉強し、将来は洋裁師として身を立てたい希望を持っていたからでした。

しかし、二年生になった春、四月二十日のこと、ちょうど歓迎遠足で宮島へ行った日、わが家が近所の類焼を受けて全焼してしまいました。私たち一家は着のみ着のままで焼け出されたのです。その日から私の望みは大きく変わり、下に四人もいる弟妹たちのことを思うと、進級はおろか本科卒業がやっとでした。

昭和二十九年三月、卒業と同時に学校も可部町に移転し、私も事務職員（第一号）として採用していただき、母校に勤務することになりました。初めての職場とはいうものの、恩師に囲まれて家庭的な雰囲気の中で毎日楽しく勤めることができました。生徒の時代は恐しいばかりであった校長先生（武田ミキ先生）にも身近かに接して、私の育ての親のように優しく、また厳しく指導していただきました。

昭和三十二年広島県可部女子高等学校新設を皮切りに、三十七年可部女子短期大学被服学科新設、三十九年食物栄養学科増設、四十年国文学科、英文学科増設、四十一年広島文教女子大学文学部新設、四十五年幼児教育学科増設、四十六年附属幼稚園新設、そして五十六年に初等教育学科増設と、私の在学中には想像もしなかった程めざましい発展を遂げてまいりました。

しかし、その発展途上はたんたんとした年月ではありませんでした。武田ミキ先生の学園経営に注がれた情熱と物心両面にわたってのご苦労は、筆舌で表わすことはできません。私も一時寝食を共にして微力ながらお手伝いしたこともありましたが、先生の情熱と人情味豊かな

お人柄にはただただ感じ入るばかりでした。

奉職中、私のもっとも印象強く残っていることの一つに、高等学校発足間もない昭和三十二年四月三十日のこと、当時可部駅裏の中屋というところにありました（現在の大和重工のあるところ）校舎が、一棟火災で全焼した時のことです。

出火時、私は可部町の役場に公用で行っていました。用事をしていますと、「武田学園が火事だからサイレンを鳴らしてくれと通報があった。」という役場の人の話し声が耳に入ったのです。私は自分の耳を疑いながらも夢中で自転車をこいで学校に帰ってみますと、もう二階建の校舎一棟が火の海でした。あっという間の出来事だったようです。焼け落ちる校舎を茫然と眺めながら、わが家に続いて二度も遇う火災の恐しさに身震いしたことをはっきり記憶しています。翌日から、父兄の協力も得て、放課後の時間を利用して教職員、生徒一丸となって後片付けに精出したものです。そして焼失した教具・校具の復興資金にと、近所の農家の麦刈り、田植え、稲刈りに

と一生懸命になって汗を流したことも、今では快い思い出として心に残っています。

もう一つなつかしく思い出されることは、三十二年に高等学校新設を始めとして毎年のように校舎の新・増築、あるいは学科新・増設と続き、それに伴い補助金、借入金の申請書作成、設置認可申請書作成と多忙な日々を送っていたことです。なかでも四十年の四年制大学新設の申請書作成のとき、九月三十日の文部省提出期限を目指して、理事長先生を始めとして横山先生、安達先生西沢先生と一緒になってがんばりましたが、私はちょうど次男をお腹に宿していました。十二月の出産でしたので申請書作成の間、体調が思わしくなく、しかも四年制大学となりますと、それまでの短大の時と違って書類の方も難しく大変な思いをしたものです。九月二十四、五日だったと思いますが、理事長先生、横山先生、安達先生と私四人で、でき上がった申請書提出のため文部省へと上京しました。帰りはごほうびに伊勢神宮にお参りして帰るようにとお許しをいただき、妊娠八カ月のお腹を

かかえ、お伊勢参りをさせていただきました。今は亡き安達先生もご一緒してくださり、あちこちと楽しく案内してくださいました。そして広島駅に着くなり「やれやれこれで一安心、僕はいつ、あんたがウーン、ウーンいい出しはしないかと、ヒヤヒヤしていたよ、ここまで帰ればもう大丈夫だね。」と笑っておっしゃったことが、ついこの間のように思い出されます。

それから十月中旬頃、理事長先生と横山先生は、申請書類の説明のため再度上京されました。そして間もなく学校気付で私宛に「スグコイ、ミキ」という電報が届きました。早速、武田学千先生が東急観光に電話して切符の手配をしてくださり、広島駅まで送ってくださいました。途中、私の家に寄り家族に事情を話し、大急ぎで身支度をして出かけようとする私を、一歳八カ月の長男がいつになく泣いて追いすがり、後髪を引かれる思いで上京しました。

まだ新幹線もない時で、特急列車で十時間余りかかったと思います。東京駅に着いたのが午前零時でした。横山先生が駅まで迎えに来てくださり、そこから都電に乗りましたが、真夜中なのに電車の中は乗客がいっぱいであり、さすがに都会を感じました。宿に着いてから朝まで徹夜で書類を訂正し、早朝、文部省へ行き、そこの印刷局で印刷をお願いして申請書を整えて提出しました。そして昼食を取るため文部省の食堂に入ったところ、ちょうど広島県庁の方とバッタリ出会い、「今頃はこちら住いですか。」とたずねられたので、「いいえ、昨夜上京して来たのです。」と申し上げたところ、その方は私のお腹を見てびっくりされた様子でした。

そんな苦心の多かっただけに、文部省から設置認可の内示があった時は、一人嬉しくて涙を流して喜びました。あれこれと思い出は尽きませんが、当時は辛く苦しかったことも、今ではとても懐かしく爽やかに思い出されます。

（武田学園評議員、武田学園事務局法人課勤務）

〝神原先生〟だからこそ

垣内　フミ子

女性であって学校を創り学校を建てる、本当に感心してしまう大きなお仕事です。先生が学校を建てられるんだと聞きました時、「先生だからできるんだ。」あの神原先生（ずっと前からお呼びしていたお名前です。）だからと驚きながら、感心と自慢に似た喜びとを同時に覚えたものです。

誠に素直に、しかしこの建学という大きなお仕事が始まるには、その大きさと同じの基になるもの、それができていたのを思うのです。先生の教育一筋に過ごして来られた長い間の努力の積み重ね、その生活そのものが、その基礎を創り出していたものと思います。私はその昔、先生のご薫陶を受けた者とは口はばったいような気がしますが、先生の教え子としてよく解っている者の一人と自負しています。本当に先生は、教育というお仕事に身も心も何もかも、すべてを打ち込んで来られたのです。

当時から、先生の教育熱心は、学校はもちろんその地域の誰もが知るところの、名だたる先生であったと記憶しています。それを物語るものとして、私がまだ教えを受けない頃の事、文部省から表彰を受けて上京された事を一大事のように聞き覚えていました。それに、勲三等瑞宝章叙勲の栄に浴された事や、その後も教育者としてたびたび表彰をお受けになり、長くその道での功労者として君臨して来られました。私の先輩も、何人も先生のご指導により、立派な教育者が生まれ、それぞれ教育の場で貢献されています。三十五年前の開校式には、そのお祝にと祝辞等用意して、何人かで遠い所に参ったのを想い出します。その場所が高宮中学の講堂であったようです。白い幕でその式場が仕切られていた事や、大勢の方がいらっしゃった事など覚えていますが、式の模様など鮮明でないのが残念です。

私は翌年四月、先生のお言葉をいただき、意を決して

可部女専に洋裁の教師としてまいりました。子供を家に残し、母と共に向う道すがら涙が何度もこぼれたのを想い出します。古市の学校に着いてみますと、まだ創立二年目というのに、先生が女子教育の理想を掲げて建てられた私立学校らしく、そこの教育方針は語らずともよく現れているのを、生徒の皆さんから学校全体から強く感じる事ができました。その校長先生は病床に伏っていらっしゃいましたが、元気な者が及ばない誠に不思議という他ないほどの教育熱を持っておられました。私も早速忙しい日々が始まり、日が経つのも忘れる位でした。その頃、私が「日が早く経った。」という事を先生に話しましたら先生は安心なさったように「それならいい……」といって笑ってくださり、そういう先生にフッとお優しい心を感じたのを、今も覚えています。そして細かい事にも常に気を使っていらっしゃるのを、いつも感じていました。私は至らぬことが多くて、とても満足できる日々ではありませんでしたが、張り切っていたものです。

毎年の展覧会、その後の移動展覧会等は、生涯忘れる事のできない大行事でした。これも前からの懸案で取りかかっていたものを、夏休みに仕上げる事となり、洋裁は大原先生と協力してまとめた事がとても印象的なものの一つです。

数えきれない想い出と共に、懐しい先生方のお顔や生徒の皆さんのあの制服姿が、走馬灯のように目の前を往き来します。光陰矢の如しと申しますが、三十五年はとても長く、その間社会の情勢も幾多の変遷があり、学校もまたその波涛を乗り越えるべく、先生のご苦労、血のにじむご努力、苦闘が秘められているのを感じます。それでも先生の教育に対しての一貫した信念、気慨、気魄は、凄まじいものと思います。どんな時も必ず強く前進なさる誰にも真似のできない強さに、頭の下がる思いです。古市時代から現在の学校と、誠に着々と規模も内容も大きく立派に発展の一途をたどり続けられている今日、このめでたい記念日を迎えられます事は、誠に嬉しく、御同慶の至りでございます。そしてつくづく識る事がで

きるといいますか思いますのは、神原先生だから女性であっても学校ができたんだと思っていた、その事がまちがいでなかったことであります。ものを識らないときの識らない者の考えといわれるかも知れませんが、そう思っていたのです。こうして創立された学校を、年と共に栄え発展させて行く、この事が大変で、本当に大きな仕事であり立派であるといえるのだと、今感じるのです。これには学千先生の一方ならぬお力と、ご立派な諸先生方が学長先生と歩みを共にして来られた賜と存じます。これからは（学長先生には叱られそうですが）、少しでもごゆっくり寛ろがれる時間をお創りになりますよう念じております。

（武田学園理事）